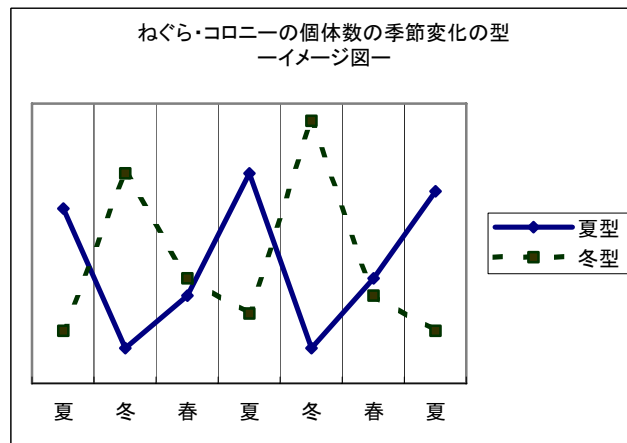


個体数の季節変化から見た関東地方におけるカワウのねぐらの特徴

加藤ななえ 高木憲太郎 (NPO 法人バードリサーチ)
成末雅恵 福井和二 金井裕 ((財)日本野鳥の会)

カワウの個体数と分布の変化を調べるために、1994年から1996年は年に2回(7月、12月)、1997年以降は年に3回(7月、12月、3月)、関東地方にあるほぼすべてのねぐらとコロニーで調査をおこなっている。そこから、ねぐらやコロニーによって個体数の変動に特徴があることがわかった。大きく分けると3つの型に分類される。

- 夏型 …個体数が夏に多くなり、冬に少なくなる…沿岸部に多い
- 冬型 …個体数が冬に多くなり、夏に少なくなる…内陸部に多い
- その他の型 …夏型にも冬型にも分類できない個体数の変動を示す



夏型 (○) 冬型 (●)
その他の型 (△) の分布



夏は沿岸に冬は内陸にカワウが多くなるのは、カワウにとって採食可能な魚の資源量の分布によると考えられている。圧倒的な資源量を有する内湾においては冬期に魚が深みに移動するため、カワウの採食効率が落ちることから、内陸部への移動があるのではないかと推測されている。基本的には、このような季節的な移動によって、ねぐらやコロニーは「夏型」と「冬型」の二つの型に分類できる場所が多いのだが、単純に二つの型に分類できない所も見られた。毎年個体数が減少して衰退してきている所や、春の個体数が極端に少なくなる所、逆に春の個体数が極端に増える所、ある年度だけ夏冬のパターンが逆転した所、沿岸にあるのに「冬型」になる所などである。そこで、そのようなやや変則的とも思える変化を示しているねぐらやコロニーのグラフを示して、その地理的条件や魚資源量の変化や人為的攪乱などの要素が、どのようにカワウのねぐらやコロニーに影響を与えているかを考察する。

この調査は、毎回、およそ 80 名に及ぶボランティア調査員の方々のご協力をいただいている。ここに感謝を申し上げる。